

古いコウノトリの剥製

脊椎動物担当 上舞 哲也

鹿児島県立博物館ではこれまで13万点を超える標本を収集してきました。その中には、古いため通常の展示に適さず、収蔵庫に眠っているものも少なくありません。現在、開催されている企画展「変な標本」では、このような“お蔵入り標本”の中から、各分野の学芸主事が一押しする標本を“蔵出し”し、展示しています。脊椎動物では、図1のコウノトリの古い剥製を“蔵出し”することにしました。



図1 展示中の古い標本

コウノトリとは

コウノトリは水田や川などの水辺で見られる大型の鳥類です。全長1m、翼を広げると翼の端から端までの間が2m程度にもなります。アムール川流域などのロシア・中国の極東地域を主な繁殖地とし、中国東北部や韓国、台湾に渡って越冬する渡鳥です。

かつては、日本にも渡ってきており、その一部は国内に留まり、北海道を除く全国各地で繁殖していました。明治期以降、国内で繁殖していたものは、環境悪化により激減し、1970年代までには絶滅しました。大陸で繁殖するものも、生息域を狭めており、現在2500~4000羽ぐらいしかおらず、国際的にも保護が急がれている鳥です。

標本ラベルからわかること

今回展示したコウノトリの剥製には、図2のようなラベルがついています。ラベルには、学



図2 標本についていたラベル

名「*Ciconia boyciana* Swinhoe」、和名「コウノトリ」、

産地「朝鮮産」と記載されています。

採集日の記載は読み取ることができませんでした。ラベルの下部には「島津製作所標本部」の文字が刻印されており、この業者により剥製の作製、ラベルの記載が行われたことが推測されます。島津製作所標本部は、大正から昭和初期にかけて活動した博物標本業者で、剥製を昭和19年(1943年)まで製造していたそうです。この剥製は、今年が西暦2021年ですので少なくとも業者が製造をやめた78年以前の剥製であることがわかりました。

余談ですが、国立国会図書館のデジタルコレクションには島津製作所標本部のカタログである「動物学及生理学標本目録(昭和5年)」が収録されています。これによると、コウノトリ剥製の価格は60円とありました。当時の月収が80円ぐらいなので、割と高価で貴重な標本ではなかったのでしょうか。

国内のコウノトリの状況は？

一度は絶滅したコウノトリですが、現在、国内での再導入、野生復帰を目指して、IPPM-OWS(コウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル)によるプロジェクトが進行中です。2005年に兵庫県立コウノトリの郷公園が始めた野外放鳥などにより、2020年までに200羽を超える個体が野外に生息するようになっています。また、野外個体数の増加に伴い、国内の複数箇所でコウノトリの飛来が確認されるようになってきており、鹿児島でも目撃されるようになりました。図3は2020年12月24日に大隅地区の某所で確認された若い個体(左:雄 右:雌)です。

今後、標本だけの存在から、身近な存在に戻ることが期待したいです。



図3 12月に鹿児島に飛来した個体